

## 開館十周年記念特別展について

館長 富岡 敬之

昭和55年10月、わが岡山県立博物館では、開館十周年を記念する特別展として「吉備の国宝・重要文化財展」を開催した。内容は、その名称が示すごとく吉備地方ゆかりの国宝・重要文化財、並びに県指定文化財等107件(149点)を展覧し、もって県内外の方々に吉備文化の精粹を鑑賞していただくというものであった。

この特別展を企画するに当たって、私たちはいくつかの困難を予想せざるを得なかった。その第一は何といっても多額の経費を要すること。第二は国宝・重要文化財等の多くが県外に所在し、うまく出陳の許可が得られるかどうか。第三は、たとえ許可が得られても、多数の貴重な文化財の遠隔地からの借用、展示等に、わが館の少数の学芸員ではたして対応できるかどうか。企画としての意義と面白さは問題ないにしても、考えれば考えるほど事の重大さを自覚しないわけには行かなかった。

以上の諸点から、私たちは理想は理想としながらも、計画の縮少を討議した。たとえば、県内に所在するものだけを一堂に集めて展示すること。これだけでもわが館としては十周年を記念するのにふさわしく、また、ひいては県民文化の向上に役立つ面を持っているのではないかと、など。そして名称も「吉備の名宝」が予定されたのであった。

時あたかも郷土紙、山陽新聞社においては紙齢3万5,000号を迎え、その記念事業が企画されていた。はからずも郷土文化の再認識という意味でわが館の企画の意義を認められ、当初の理想案の実現のための共催を提議されるに至った。このようにして、岡山県・岡山県教育委員会・岡山県立博物館・山陽新聞社による実行委員会が結成され、展示の企画と実施を博物館が、事業の運営と広報を山陽新聞がそれぞれ責任をもっておこなうこと

が合意された。

しかし、これですべて問題点が解決されたわけではない。県外所在の吉備ゆかりの国宝・重文の多くは「お里帰り」ということで所蔵者・管理者の御理解は得られたものの、少数の学芸員による移動や、一個所にこのような多数の指定文化財を集中することの危険性等に対する文化庁の御指導もあった。文化財の公開というメリットはともかく、保護の観点からは御指摘は尤もであり、この両側面を兼ね備えた特別展にすべく、館も社も一体となって努力したことを特記して置きたい。

けれども、努力だけでは何ともできないこともある。たとえば、学芸員の不足という物理的要因などがそれで、今回、指導に当たられた文化庁、東京・京都・奈良国立博物館等の担当官の献身的な御協力がなかったら、本特別展の開催は不可能だったにちがいない。

今回の特別展の構成は次の通りであった。

1. 吉備ゆかりの高僧、法然・重源・栄西・一遍・寂室に関する資料。
2. 吉備地方に保存されているものを中心とした仏画・仏像・神像など宗教美術関係の資料。
3. 吉備地方が生んだ著名な画人、雪舟・宮本武蔵・浦上玉堂の作品と、関連する資料。
4. 吉備地方の名産であった備前刀その他の刀剣、およびこの地方に伝来された甲冑など。
5. その他、戦国武将像、文書など1~4の資料を補完する関連の資料。

特別展は県内外から約5万人という多数の鑑賞者を迎えて、1カ月間の会期を成功裡に終了することができた。特別展図録と重複する所もあったが、ここに概要を述べて、岡山県立博物館の記録としたい。

# 特別展を終えて

学芸員 守 安 収

秋の特別展が終了しておよそ1カ月、師走も半ばを迎えた現在、ようやくお預りしていた貴重な資料をすべて無事、全国各地の所蔵者の下にお届けすることができた。館内に溢れていた会期中のあの熱気も興奮も今はなく、展示場はひっそりと静まりかえり、来館者の話し声や靴音が、時折響くのみである。そして、我々館員の間にもやっと落ち着きとゆとりが戻ってきた。資料返却の完了こそ、真の意味での「吉備の国宝・重要文化財展」の閉幕を告げる証しであった。総てをつつがなく終えたあとの快い安堵感は、我々を十分に満して余りあるものだった。

今回の10周年記念展は、当初の「吉備の名宝展」構想を拡大し、地方博物館としては画期的な規模で開催するという特殊性が内包されていた。さらにそれは、我々にとって地元新聞社との共催という初めての試みでもあった。

我が館は、中国・四国では唯一の重要文化財勸告承認出品館に指定されている関係上、地方館の割に、指定文化財の取り扱い事例が比較的豊富であった。そして原理的には特別展とはいえ、万が一の事故も許されぬ博物館の日常業務と何ら変わるところがないという側面もあった。とはいえ、企画の時点で国宝・重要文化財指定品が100件近くにのぼるとなると、館員の緊張感や不安感はおのずと高まり、到底拭い去れるものではなかった。



第2展示室 宗教美術

最大のネックは借用交渉に在った。県内資料に関しては一応の目処もついていたが、多くの比率を占める県外所在分においては、その見通しはゼロに等しかった。しかも、開催まで約8カ月という時間的制約に加え、学芸員数わずか5という物理的制約が重くのしかかってきた。各方面から、企画どおりの実現は不可能であろうと懸念されたのも無理からぬことであった。だが、これは幸いなことに杞憂に終わった。

春から夏にかけて、我々は遮二無二に借用のための交渉を続けた。美術を担当した私個人に限ってもいろいろな局面に出会すことになった。「里帰りさせて下さい。岡山で初公開させて下さい」とお願いした時、「大勢にみられると目くそがつく」とあっさり断われたこともあった。博物館の人間として、これほどまでにショックを受けた言葉は過去になく、口惜しく、腹立しく思ったこともなかった。だが、殆んどの所蔵家や関係機関からは、暖かいご厚意が示され、あつかましく申し出たこちら側が逆に恐縮するほどであった。

ある時、岡山の地に偉大な足跡を刻みつけた俊乗房重源の縁を辿り、播磨浄土寺を訪れた。上人像に加え、以前、学生時代に拝み観た裸形の弥陀像をもともと無理を承知でお願いしたところ、ご住職はしばらく臉を閉じられた後、承諾の旨を告げられた。快慶一門の手で造像されたこの金色に輝く阿弥陀如来は、重源ゆかりの資料の背後で、かれの作善のシンボルとして展示場に君臨し、生彩を放ってくれた。本当に有難かったが、今にして思えば随分と強引な交渉の一幕であった。

鎌倉に川端家を訪ねたこともあった。浦上玉堂の最高傑作と衆目の一致する「凍雲箭雪図」は、手紙や電話での感触から判断すると、あきらめざるを得ない状況にあった。ところが、お眼にかかるとお許しが戴けた上に、ご秘蔵の大雅・蕉村筆「十便図・十宜図」まで拝見させていただけるという学芸員冥利に尽きる思いまで味わうことができたのである。



第3展示室 雪舟・武蔵・玉堂・戦国武将

かくして、我々の予想を遥かに凌ぎ、交渉は順調に進んでいった。とはいえ、展示期間に限度のあるものが殆んどで、代替用に常時展示資料の2倍近い物件を用意する必要があった。しかも、歴史展示を目論んだ我々は、展示替を行った際でも、新旧両者がほぼ同義同等であって、展示の流れが変わぬことを望んだのである。したがって、出品物の決定までには、やはり相当の日数を費してしまった。

その後、文化庁への手続き、安全な輸送計画の作成、図録の撮影制作など事前の準備に忙殺される毎日が続いた。そして、資料収集の段階に至ったが、圧巻は、パトカーに先導された東京からの輸送で、窮屈な姿勢や睡魔と戦いながらの15時間の長旅であった。これは懐しい思い出となった。いずれにしろ、開催のテープが切られるまでは、あたかも時間との競争の様を呈した。

会期中は、温湿度や照度にも留意したつもりである。さらに、毎日の天候や鑑賞者の雰囲気にも気を配るなど、保全、警備の面でも苦労が多かったが、全館挙げての協力体制でどうやら乗り切ることができた。

このたびの展覧会が多くの方々本当に暖かく迎えられたことで、我々は、これからの博物館のあり方を考えていく上で、一つの手掛りを得たような気がする。なお一層努力して、岡山県の歴史と文化についての理解を深めていく展示を企画していきたい。

最後に、格別のご援助を賜りました所蔵者・文化庁国立博物館他関係機関、および日本通運美術品輸送課の皆様には心から感謝を捧げます。

## 国宝・重文展

を見て……………

総社市史編さん調査研究員

細谷 孫一 さん(65)

130点を越え、しかもこれほど見事な国宝や重要文化財が一堂に集められているのに驚きました。

仏像にはとくに興味があり、なかでも快慶の作といわれる播磨・浄土寺の「阿彌陀如来立像」は鮮やかな金色で、高さも3メートル余りという立派さで圧巻でした。また、日応寺の「不動明王立像」も迫力が感じられました。仏画では頭上に月をいただき温和なふん囲気の漂う捧沢寺の「地藏菩薩像」が印象に残っています。そして、寂室元光がこの作品を書き終え、その日に亡くなったと伝えられている永源寺の「寂室元光墨蹟遺偈」は味わい深い書風で、またいかにも最後の気力をふりしぼって書きあげたという感じが出ていて心を打たれました。

会場内の展示の仕方も「高僧」「雪舟・武蔵・玉堂」「刀剣・甲冑」などコーナーごとにまとめているし、作品の前に置かれた説明パネルも要領よく、大変鑑賞しやすかったと思います。(総社市史編さん調査研究員)

新見市新見婦人会会長

野林 薫子 さん(60)

私達の婦人会は約600人のメンバーで組織していて、各地の美術展などには積極的に出かけていくようみんな誘い合っています。そんな活動を続けているうえからも、これほど意義のある展覧会を見逃すわけにはいきません。そこで、できるだけ多くの会員に鑑賞してもらいたいと呼びかけるには、まず私たちが、と20人が先発隊として訪れました。

仏像、絵画、刀剣、あるいは書にしても、とにかくどの作品を見ても根気と努力の結晶のようで吉備の国の先人たちの偉大さに感激しました。とくに、日応寺の木造「毘沙門天立像」「不動明王立像」などの彫りのあとには、機械に頼りがちの現代では想像もつかないような手仕事の迫力と人間味が感じられました。

絵画では、頼久寺の「釈迦三尊像」や宝福寺の「十王像」などの着色がいかにも仏画にふさわしい独特の色あい、不思議なふん囲気の中にひき込まれていくようでした。会期中には引き続いて他の会員たちも鑑賞に訪れると思いますが、そのあと、みんなの感想をまとめた「感想集」をプリントするつもりです。

(「山陽新聞」より転載)

## 昭和55年度 成人大学講座

一般県民を対象に、「岡山県の歴史と文化」を紹介する「成人大学講座」は、好評を得て本館の恒例の行事となっているが、応募者が多いため、本年度は前年度受講者には御遠慮を願った。しかしなお募集人員60名に対し応募者は106名に及んだ。出席率も概して良好で82%。講座の内容は下の通りである。

テ　　マ	講　　師	開講日
1.博物館の仕事	学芸課長 浅原 健	9/19(金)
2.部落の歴史	主任学芸員 柴田 一	”
3.<文化財見学> 牛窓方面	主任学芸員 柴田 一 主 任 竹林栄一	9/26(金)
4.森田 思軒	館 長 富岡敬之	10/11(土)
5.特別展・ 特別講演		10/11(土)
(1)中世の長船刀 工について	東京国立博物館刀剣室長 加島 進	
(2)日本の甲冑に ついて	文化庁美術工芸課主任 文化財調査官 鈴木友也	
6.岡山県の絵画	学 芸 員 守安 収	10/17(金)
7.中世備前焼の 流通と分布	学 芸 員 臼井洋輔	”
8.児島湾の漁業	主 任 竹林栄一	10/24(金)
9.岡山県の歴史と 県 民 性	主任学芸員 柴田 一	”

### 受講者の声

受講生の皆さんから、たくさん御礼状や感想文を頂きましたが、そのひとつ楳野知子さんの御手紙を紹介します。

11月に入りますと朝夕の寒さもひとしお身に沁みる様でございます。

9月から始まり10月24日迄の長い間、成人大学講座館長様始め諸先生方には吉備の国宝展の本当に御大事な時に、私共の為に講座を御開き頂き感激此の上御座居ま

せん。

神戸より参りまして二年、気分も落ち着き岡山の事を少し知り度い位で応募しましたのが一べんで当たり、大して有難味も感じず参りました。

ところが受講して日を重ねます毎に私の様な無知な者でも思わず引き込まれていく色々な歴史、諸先生方の御造詣の深さ、学問を研究なさる方はこうも御人柄としてにじみ出るのが温厚な雰囲気、諸先生方が皆同じに感ぜられるのは何故なのでしょう。本当に強く強く印象として心に刻み込まれました。

播鉢一つにしてもこんな古い歴史が有ったのかと、時の移り変わりと古さに対して改めて認識を深くいたしました。受講後は新聞等の古墳の字にも引きつけられ、道を歩いていてもこの石にもひよっとしたら何か歴史が有るのではないかと、本当に見る目を変えて戴きました。日々新しく知る喜びを与えられ、心豊かに生活出来る様になりました。

これから先は度々博物館に足を運び見聞をひろめ度いと存じます。本当に有難うございました。

館の御発展と館長様始め諸先生方の御健康と御多幸を御祈りしながら御礼の言葉にもなりません厚く厚く御礼申し上げます。

楳野知子



牛窓町本蓮寺本堂前での記念写真

岡山県立博物館だより No. 15

発行日 昭和56年1月31日  
 発行者 岡山県立博物館  
 館長 富岡敬之  
 岡山市後楽園1-5  
 ☎(岡山)72-1149